

NEWSLETTER

No.1
Vol. 43
2016.10

What's
New

「熊本地震支援活動」

「太田厚生労働大臣政務官 浜松医科大学を視察」

教育・研究・診療及び社会貢献活動を推進していくために



浜松医科大学基金へのご協力をお願い

基金の設立にあたり、ご挨拶申し上げます。

浜松医科大学は、開学以来、教育、研究、診療、地域貢献、産学官連携、国際交流等、多方面に渡り実績を積み上げてまいりました。単科医科大学として健全な財政を堅持しながら、光医学を中心とした研究に集中的に資源を投入することで、本学の独自性を担保し、地域企業を中心に産学連携を展開してきました。さらに、高い国家試験合格률을維持しながら、県内出身者を増加させ、地域の医療に貢献する優れた医師を養成してきました。これは偏に皆様方の多大なご理解とご支援の賜物であることは論を俟ちません。

私たちは、これから新たな挑戦をしていきたいと考えています。学生の海外留学に向けた支援体制を強化し、国際感覚を涵養するとともに、海外から優秀な大学院生を招へいします。光医学研究の深化とともに新たな研究シーズを探索するために、研究機器と人材を確保します。さらに地域の諸機関と密接に連携しながら地域医療体制の中核的存在として高度で安全な医療を提供し、地域医療に貢献します。

そのためには、皆さまのご支援がどうしても必要です。大学を取り巻く環境は年々厳しさを増していますが、大学独自の裁量で新たな試みを行うために、新たな基金を設立することといたしました。

浜松医科大学基金の趣旨をご理解いただき、格別のご協力とご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

浜松医科大学長

今野 弘之

浜松医科大学基金の目的

教育・研究・診療及び社会貢献活動を推進していくために募金活動を行うこととし、「浜松医科大学基金」を設立しました。

「浜松医科大学基金」によって、医学及び看護学の教育研究に打ち込める環境や様々な交流を行う機会を提供することにより、将来性豊かな多くの若者を優れた医療人や研究者に育てたいと思っています。浜松医科大学はこれからも地域社会に貢献しつつ、本学の特色を世界に発信していきます。

基金による事業計画



基金の管理運営

浜松医科大学長を委員長とする「基金運営委員会」を学内に設置して管理運営を行います。基金の管理運営に関する重要な事案等については、本学基金ホームページに掲載し、透明性を確保します。

ご厚意に感謝して

一定額以上のご寄附をいただいた方に記念の品を贈呈し、お名前を浜松医科大学基金ホームページに掲載するほか、大学内の「浜松医科大学基金寄附者銘板」に記して永く顕彰させていただきます。

■ 詳細は浜松医科大学基金ホームページへアクセスしてご覧ください。
https://www.hama-med.ac.jp/uni_index_kikin.html

目次

トピックス 1-2

- 浜松医科大学基金へのご協力をお願い

寄稿 3-4

- アドロー
●阿蘇はADRO(Aso Disaster Recovery Organization)で戻ろう! 3
- 熊本地震支援活動報告 4

新任職員の紹介 5-6

お知らせ 5-6

- 太田厚生労働大臣政務官 浜松医科大学を視察

研究最前線 7

- 支持療法:ナノスーツ®の医療応用を目指して

海のむこうで 8-10

- 日米医学協力プログラム50周年記念式典・シンポジウムに出席して 8
- 俺の留学体験記 9
- イタリア、ミラノで学ぶ小児医療と国際交流 10

大学ニュース 11-20

- 各種行事 11-12

●サークル活動の記録 13

●サークル紹介 14

●留学生の紹介 15

●平成28年度入学者選抜試験実施状況 16

●国家試験合格状況 17

●第110回医師国家試験大学別合格状況 18

●平成27年度卒業生・修了者進路状況 19

●学会賞等受賞 20

卒業生は今 21-22

●さいたまの地で、浜松医科大学の卒業生として 21

●クリティカルケア看護の可能性 22

表紙の写真 「医のプロムナード」

附属病院から研究棟へつづく渡り廊下が「医のプロムナード」として生まれ変わりました。ディスプレイが整備され、本学の地域貢献や教育研究活動をよりわかりやすく、より親しみやすく展開する広報活動の場となりました。通りがかりに是非、すこし足を止めてご覧ください。

平成28年8月撮影



阿蘇はADRO (Aso Disaster Recovery Organization) で戻ろう!

アドロー

救急部
助教 高橋 善明

2016年4月14日21時26分、熊本地震発生。私は急ぎ職場に向かい、DMAT (Disaster Medical Assistance Team) 出動に備えた。結局、災害急性期に対応するDMATとしての出動要請はなかったが、発災12日目の4月26日、私は静岡県医療救護班浜松医大チームの一員として、熊本県阿蘇市にある阿蘇医療センターへ派遣されることとなった。

阿蘇医療センターは阿蘇医療圏のほぼ中央に位置する、医療圏唯一の災害拠点病院である。免震構造で建物被害はほとんどなく、私たちが訪れた際にはライフラインもほぼ復旧していた。私たちは阿蘇医療センター内に設置されたADRO事務局に入り、ロジスティクス業務(医療チームの人的・物的支援、業務調整、情報連絡処理等)を行うこととなった。

東日本大震災で亜急性期～慢性期の医療ニーズの把握や医療支援チームの配置調整が困難な状況が生じたことを踏まえ、二次医療圏単位での地域災害医療対策ネットワーク構築や、それを取りまとめる災害医療コーディネーターの設置が現在全国各地で進められている(救急災害医学講座 吉野教授は県西部統括災害医療コーディネーターである)。しかし阿蘇医療圏ではこのような制度は定められておらず、熊本県からの指示でこれを代行したのがADROである。つまりADRO事務局は阿蘇医療圏の医療支援の中心となる場所であり、私たち浜松医

大チームは図らずもこの中核に入ることになったのである。

ADRO事務局はまず、多数の医療支援チームを取りまとめ、各々に役割を振った。各避難所や施設を巡回する役割を受けたチームは、そこで医療ニーズを収集した。収集した医療ニーズを基に、必要とされる人的・物的資源がアセスメントされ、それぞれ適切な場所に供給された。例えばある避難所でノロウイルスが発生し感染対策が必要と判断したら、ICT(Infection Control Team)を立ち上げて、罹患者への対応や衛生環境の改善に取り組んだ。さらに複数の病院でスタッフ(特に看護師)が疲弊していると判断したら、医療支援チームのメンバーを夜勤業務の代行に派遣した(現地の病院スタッフは車中泊や避難所生活を続けながら、休むことなく通常勤務を続けていた)。また毎夕には保健所、病院、救護班、地元医師会、消防など、関係各機関の代表者がADRO事務局に集まり連絡会議を開催した。ここで各機関からその日の報告を受け、最後に明日以降の活動方針を皆で共有した(この会議の議事録作成こそ、私たちが最も労力を要した業務であった)。

4泊5日の救護班活動であったが、私たちはそのほとんどをADRO事務局内で過ごした。私自身はこれまでDMATとしての災害急性期の活動しか想像していなかったのだが、この救護班活動を通じ、亜急性期～慢性期の災害医療を体感

することができた。ADROが掲げていた活動ポリシーは、「すべては被災者のために」と「保健師さんを支える活動を」の2つであった。医療救護班としての活動は被災者支援が目的であることは言うまでもないが、その最終目標は救護班が構築した医療ネットワークを地元の保健医療体制に、スムーズにお返しすることなのである。「阿蘇はADROで戻ろう!」ADROの入り口にスタッフの誰かが掲示した、洒落のようなこのフレーズがまさに、災害医療の慢性期に最も必要なことを示してくれていた。夕日に照らされた美しい阿蘇の山々を見て熊本の一日も早い復興を祈りつつ、浜松へ戻ったら日々粛々と次の災害への備えを進める決意をして、私は帰路についた。最後に、救護班派遣に関し勤務調整や資機材準備など、バックアップしてくれた全てのスタッフに心からお礼を申し上げたい。



多機関が集うADRO連絡会議の様子



ADRO事務局前で、浜松医大チームのメンバーとともに(中央が筆者)

熊本地震支援活動報告

浜松医科大学災害支援サークルLuce 代表
医学部医学科3年 稲葉 和真

浜松医科大学災害支援サークルLuce(ルーチェ)では先に発生した熊本地震の際に支援活動を行いました。以下、Luceというサークルについてと、Luceが熊本地震の際に行ったことの二点について、この場をお借りして紹介させていただきます。

まずLuceに関して簡単に説明いたします。Luceは東日本大震災の教訓を受け継ぎ、次の震災に向けた活動に活かし、被災地のために自分たちにできる支援を行うことを目標とする災害支援サークルです。

我々が現在行っている活動は大きく分けて3つあります。

1. 東海地域で起こりうる災害に備える。
2. 定期的に東北地方を訪問しボランティア活動を行い現地の状況の変化を追う。
3. 他地域で災害が起きた時に学生ボランティアとして活躍する。

具体的には、ボランティア活動の際に活かせるような搬送法などの技術を学ぶワークショップを開催したり、本学の救急部の先生方をお招きして講義をいただいたり、東北地方へボランティアに行ったLuceのメンバーによる報告会を行ったりなど、先に述べた目標を達成するべく常日頃から切磋琢磨しております。

今回の熊本地震を受けての活動は、Luceとしては初めての“亜急性期における組織だった被災地支援”でした。以下、Luceが熊本地震が起こった際に実際に活動したことについて紹介いたします。

我々Luceは発災直後から、震災に関する情報収集を行い、正確な被災地の状況を把握できるよう努めてまいりました。その上でLuceとしてできることはあるか、あるとしたら何かについてミーティングを行い、つぎの異なる三つのかたちで被災地を支援させていただくことにしました。

1. 直接的な被災地支援

熊本市災害ボランティアセンターを通じて活動をしました。内容としては物資の仕分け・介助の補助・子供達の相手や避難所運営の補助(掃除や傾聴、配膳)等、様々な活動を行いました。GW前の亜急性期に現地入りしたため統制が取りきれない地域もありニーズも様々でした。ボランティアの母数が少ないうちから活動できたためLuceメンバーの貢献度も大きかったと推定出来ます。県庁を訪問し現地のボランティア運営についても学びました。

2. 物資支援

浜松市内のクリニックと連携をして熊本市への物資支援を行いました。食料(飲料水、缶詰等)や日用品(トイレットペーパーや紙オムツ・マスク等)の募集をかけました。学生だけでなく学内の先生方、学務課の方々からも支援をいただき多くの物資支援を行えました。

3. 募金活動

他大学(聖隷クリストファー・常葉・浜松学院)と合同で浜松駅前にて募金活動を行いました。学内においても募金箱を設



学生ボランティアとして地震防災訓練に参加(左が筆者)

置し支援金を募っています。他大学との共同募金では非常に多くの方のご厚意により寄付金をいただくことができました。集まった寄付金は、熊本県の社会福祉協議会を通じて現地に寄付いたしました。

将来起こりうる災害に対して対応できる人材を育成し、浜松が被災した際に病院や地域の支援を効果的に行えるようになるため、一連の活動を通じて得た経験を活かしながら、今後も積極的に各活動に取り組んでいきたい所存です。

最後に、今回のLuceの活動は非常に多くの方々のご支援、ご協力があつてこそ成り立っているものでした。この場をお借りしてLuceを支えてくださった皆様に御礼申し上げます。



熊本 ボランティア受付場所



熊本 ボランティア支援集合



熊本地震物資支援

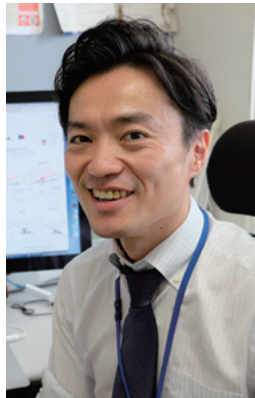


浜松駅前 募金活動



ADROロゴは「くまモン」がモチーフ

New Staff Introduction



精神医学講座 教授
山末 英典

【専門分野】精神医学

本年6月から着任した山末英典と申します。企業の研究員をしていた父親の仕事の関係で、小学校の途中まで静岡県榛原郡の吉田町で育ちました。今回こちらに赴任し、温暖で穏やかな気候を懐かしく感じるとともに、静岡県の医療の発展に貢献出来る機会を頂き、とても嬉しく思っております。

平成10年に横浜市立大学を卒業した後は、都立病院の研修医を経て、平成12年に入局して以降本年5月までの16年間、東京大学精神神経科で、脳機能や形態を検討して精神疾患の中間表現型を同定するマルチモダリティのMRI研究と、同定したMRI指標を評価項目に新しい治療候補物質の精神症状や脳機能への効果を検討する医師主導の自主

臨床試験などを行なって来ました。また、大卒後どの時期にもフルに診療を行なって来ました。そうしたこともあって、特に治療薬開発の研究を行なう機会を得てからは、医学研究の最終目的は現在の医学で満たせない患者さんのニーズを解決出来るようにすること以外にないと考えています。今回赴任して1ヶ月が経ちましたが、浜松医科大学精神科とその関連病院が、精神疾患の患者さんのニーズに正面から向き合って応えようとする基本姿勢を自然に持っていることに感銘を受けています。今後、講座、そして大学全体、さらには医学全体の発展に微力ながらも貢献出来るように尽力して参りますので、どうかご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



臨床腫瘍学講座 教授
山田 康秀

本年4月1日から臨床腫瘍学講座に着任しました。神奈川県川崎市高津区に生まれ、駒場東邦中学、高等学校へ進み、1989年に弘前大学医学部を卒業。弘前大学第一内科に入局時から消化器癌の診断、治療に携わり、主に腫瘍内科医として勤務してきました。1996年4月から、癌研病院化学療法科、国立がん研究センター中央病院消化管内科では、抗がん剤/分子標的治療薬の臨床早期開発、標準治療の確立、トランスレーショナル・リサーチ等が主な仕事でした。2015年4月からは日本医療研究開発機構の戦略推進部研究企画課で、新たな研究課題の創出、調査研究等を行っています。

臨床腫瘍学講座で行う仕事は、基礎や臨床の医師、看護師、薬剤師、MSW、CRC等、多職種の方々とネットワークを作り、協調して目標へ進んでいくことで初めて成り立ちます。2015年12月には、政府が1)がんの予防、2)がんの治療・研究、3)がんとの共生という3つの柱からなる「がん対策加速化プラン」を策定しました。臨床腫瘍学講座では、がんに対して様々な視点から策を講じ、がん診療に携わろうという希望のある医師を待っています。いつでも医局を訪ねてきて下さい。



児童青年期精神医学講座
特任教授
高貝 就

【専門分野】児童精神医学

平成28年4月1日付けで、児童青年期精神医学講座の特任教授を拝命しました高貝就と申します。平成8年に新潟大学医学部を卒業後、森則夫前教授が着任したばかりの本学精神医学講座に入局し、その後は本学附属病院や関連病院で臨床に従事してまいりました。

平成24年からは本講座の杉山登志郎前教授のお導きで天竜病院に赴任し、児童精神病棟の開設に携わる貴重な経験をしました。その後は前職である本学子どものこころの発達研究センターで、連合大学院での教育にもかかわってまいりました。

今世紀に入り、少子化がすすむ一方で発達障害や児童虐待の問題が社会的にもクローズアップされています。これらの問題を抱えた児童も時間の経過とともに成人になっていきます。このため、これからの時代の精神科医は成人のみならず児童臨床の心得があることが望ましいと考えています。

本講座は静岡県による寄附講座であり、県内の児童精神医療の拡充を目的に設置されました。今後は寄附講座の使命を果たすとともに、精神医学講座および子どものこころの発達研究センターと協力して人材育成に力を尽くしてまいります。皆様方にはご指導ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。



長寿運動器疾患教育研究講座
特任准教授
戸川 大輔

平成28年4月1日付で新たに設置された寄附講座『長寿運動器疾患教育研究講座』の特任准教授を拝命いたしました。神奈川県で生まれ育ち、山形大学を卒業、藤沢市民病院で研修し、横浜市立大学整形外科で学位を取得いたしました。その後アメリカ・オハイオ州クリーブランドクリニックに5年9ヶ月在籍し基礎研究、臨床研究に携わった後、函館中央病院脊椎センターで6年4ヶ月の間仕事をして参りました。本学には平成24年1月からお世話になっております。

脊椎椎体骨折に対する経皮的椎体形成術(BKP: Balloon Kyphoplasty)という1手術手技の基礎から手術機器の開発までに関わり、日本での臨床試験、薬事承認、保険収載、そして安全な手術手技の普及という大事業を通して、様々な事を学び、考えさせられました。中でも高齢者に対する診療はこの10年で

大きく変化してきたように思います。本邦では高齢化率(65歳以上の人口が総人口に占める割合)が26%となり、今まで以上に高齢者に対する積極的な診療が望まれています。痛みを抱えて動けなくなってしまう高齢者と、元気に毎日散歩する同じ年齢の高齢者では生命予後が大きく変わります。また、痛くなく動ける高齢者の生活の質が高いことも明らかになってきています。痛みの出にくい体作り、痛みに対する早期診断、より良い保存治療と低侵襲治療、障害を抱えながらもより良く生活する環境作りなど、課題は山積みです。

今までは我が儘に移動して仕事をして参りました。これからは全国トップクラスの健康寿命を誇る静岡で、高齢者に優しい、積極的な運動器診療に力を注ぎたいと思います。ご指導、ご鞭撻の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

太田厚生労働大臣政務官 浜松医科大学を視察

6月3日(金)、太田房江厚生労働大臣政務官が、三宅邦明医療機器政策室長らとともに本学を訪問されました。山本理事(教育・産学連携担当)から本学の産学連携の取り組み状況を説明した後、はままつ次世代光・健康医療産業創出拠点、静岡県、浜松市、浜松商工会議所、浜松地域イノベーション推進機構の担当者と医療機器開発の推進について意見交換をしました。引き続き、学内にある研究室で、企業と連携して開発中の医療機器を見学されました。



光先端医学教育研究センター産学連携推進部にて意見交換



手術ナビゲーションシステム視察



立位PET-CT装置視察

支持療法：ナノスーツ®の医療応用を目指して

1. 支持療法

支持療法は、がんの治療に伴う副作用を軽減し、患者の生活の質を維持・向上する緩和医療の一つです。特に、がん化学療法は長期にわたるため、副作用対策としての支持療法が必要です。支持療法は、経験に基づいて治療内容が確立しつつありますが、基盤となる基礎及び臨床研究は、まだ乏しいのが現状です。そのため、厚生労働省は「がん対策加速化プラン（2015年12月）」のなかで、支持療法の開発・普及を目指すことを宣言し、学術活動では、日本がんサポーターブケア学会が発足しました（2015年）。支持療法が、臨床試験を行う研究領域として色合いを帯びるなかで、化学療法に伴う副作用のメカニズムを解明する基礎研究を行えないものかと、私は考え始めました。

2. 皮膚障害とナノスーツ®

多くの抗がん剤は、上皮系の細胞の機能を阻害します。化学療法によって悪性腫瘍に効果が現れる一方、正常組織の一つである皮膚にも副作用が生じます。化学療法による皮膚障害は多様ですが、一般に乾燥肌を誘引するなど共通した変化を伴います。

陸上の生物は、乾燥から個体を守るために皮膚の外側にWaxなどを分泌し、乾燥から個体を守っています。本学生物学研究室では、この生物がもつ分泌物、あるいはその疑似物質に電子線やプラ

ズマなどの高エネルギーを照射して、ナノスーツ®と呼ばれる重合薄膜を形成させ、高真空条件においても生命維持させる技術を開発しました。この薄膜をヒトの乾燥肌研究に応用することが出来れば、医療に役立つかもしれないと考え、針山孝彦教授と共に、ナノスーツ®法の医療応用に取り組んでいます。

化学療法によるヒトの皮膚の影響について、三次元構築した培養細胞を用いて検討し、ナノスーツ®法で電子顕微鏡観察することに成功しました。薬剤の影響を考えると、通常、患者に薬剤の副作用が現れるには、数週間から数ヶ月かかることがあります。この方法を用いればわずか数日で皮膚への影響を評価でき、患者に負担をかける心配もありません。皮膚に副作用を起こしやすい抗がん剤を添加した人工皮膚と、無添加のものを比較すると、微細構造の顕著な違いを観察することができました。

次に、皮膚に副作用が生じたときの治療法について検討しました。細胞には、複雑な情報経路があります。ある一つの経路が薬剤で阻害されると、予期しない変化が細胞や組織全体に生じることがあります。化学療法で阻害された情報経路を、別途薬剤投与することなどで回復させれば、皮膚障害を軽減できるのではないかと考え、実験を進めています。臨床応用を目指すには、まだ多くの問題解決が必要ですが、今までに見出した基礎的

な内容と成果をまとめ、昨年日本癌治療学会で発表し、優秀演題賞を戴くことができました。

3. 一般教養科目の重要性

現在取り組んでいる実験は、主に生物学教室との共同研究です。臨床医としてナノスーツ®の研究に携わるなかで、生物学が医学への理解の土台となっていることを実感しています。

また、医師の職務は患者やその家族に接し、患者の回復の喜びだけでなく時として人の死にも携わることがあります。人の心や振舞い、社会と個人との関わりなど、科学的な思考や科学技術の進歩だけで解決できるものではありません。その意味において、生物学をはじめ一般教養全般を学習する必要があり、多くの体験と共に普遍的なものの考え方を得ることが、とても重要ではないかと思います。

4. 支持療法の将来像

支持療法は、今後科学的な知見を蓄積しながら体系化される医療の一つです。ただし、支持療法が専門領域として確立される一方、副作用対策に特化して差別化が図られることは、必ずしも望ましいことだとは思いません。支持療法の目標は、広く緩和医療を推進し、患者・家族を支援することです。今後とも各科諸先生及びスタッフの皆様の指導をいただけますよう、よろしくお願い申し上げます。



皮膚科学講座 准教授
平川 聡史



三次元構築した
皮膚細胞シートの
作成

この研究を進めるにあたり、生物学の高久康春先生、妹尾千代さん、光先端医学教育研究センターの太田勲さんを始め、多くの方々のご指導とご協力を戴いており、この場を借りて感謝いたします。

海のむこうで Beyond the Seas

日米医学協力プログラム 50周年記念式典・ シンポジウムに出席して



基礎看護学講座 教授 永田 年

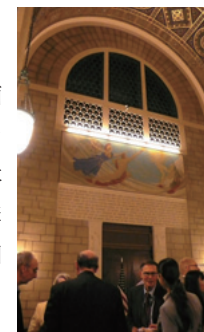


右から瀬戸先生、小出先生と筆者

日米医学協力プログラム50周年記念式典及びシンポジウムが1月に米国ワシントンDC郊外で開かれ、小出幸夫先生（前理事・副学長）、瀬戸真太郎先生（前感染症学講座、現結核研究所）とともに参加しました。私が微生物学講座在籍中、小出先生の元で結核ワクチンの研究を行っていた時以来の久しぶりの参加でした。会場では相村春彦先生（腫瘍病理学講座教授）ともお会いしました。

「日米医学協力プログラム」（US-Japan Cooperative Medical Science Program; USJCMSP）は、1965年当時のジョンソン大統領と佐藤栄作首相の合意のもと開始された医学研究プログラムです。当初はコレラ・結核・ハンセン病・寄生虫疾患・ウイルス疾患の感染症5領域のパネルから構成されていましたがその後、肝炎・AIDS・急性呼吸器感染・免疫等の領域が順次追加され広範囲なプログラムとなっています。プログラム開始時の目的は、東南アジア諸国の感染症対策にあったようですが、現在は環太平洋地域諸国も含めて広くアジア諸国の感染症対策に変化してきています。今回の50周年記念行事にはアジア諸国の研究者の招待参加が多数あり、このプログラムの大きな節目であることを実感しました。この50年間の感染症対策の成果としては、経口補液療法によるコレラの制御、B型肝炎・コレラ・インフルエンザ等に対するワクチンの開発、多剤併用療法や直接監視下服薬短期療法（DOTS）による結核の制御、大村智先生の開発されたイベルメクチンによるフィラリア症の克服等があります。

50周年記念式典・シンポジウムは、米国立衛生研究所（以下NIHと略す）のあるベセスダ近郊のホワイトフリントで開催されました。式典では、Fauci NIH長官や佐々江駐米大使の祝辞、日米研究者による記念講演がありました。夜はワシントンDCポトマック河畔にある米国科学アカデミー（National Academy of Sciences; NAS）に会場を移しレセプションが開催されました。米国科学アカデミー紀要（PNAS）という権威ある科学雑誌で有名な組織です。科学の殿堂とも言えるNAS本部へ入る機会は滅多に無く今回の訪問は楽しみでした。ドーム天井の大ホールには、天界から火を盗んで人類に与えたプロメテウスなど科学の歴史に関する壁画がありました。レセプションでは、日本医療研究開発機構（AMED）とNIH間の協定の調印式も行われました。



米国科学アカデミーでのレセプション

その後、各パネルにわかれシンポジウムが行われました。我々の参加した結核・ハンセン病パネルでも、新規結核ワクチン開発、迅速な診断法、新薬開発も含めた治療法等に関する活発な議論がなされました。特に結核・ハンセン病パネルは、フィリピン、ネパール等アジア諸国から多数の研究者が参加していました。結核はわが国でも依然重要な感染症ですが、アジア諸国では多剤耐性結核が今も深刻な問題です。



結核・ハンセン病パネルシンポジウム

シンポジウムが終わった後、メトロで2駅離れたNIHを訪れました。ベセスダの広大なNIHキャンパス内には多数の医学関連の研究所が存在しています。その中のNICHD（米国立小児健康発達研究所）は、私がポストドク時代に免疫学の研究に携わっていた思い出深い研究所です。当時の研究室を訪れました。NIHは入所時のセキュリティチェックがとても厳しくなっており時代を感じました。突然の訪問にもかかわらず留学時の上司であった尾里啓子博士とインド人研究者のAnupが「Hi, Toshi!」と快く迎えてくれました。尾里博士は論文を執筆中、Anupは試料を冷やすためのアイスボックスを前にして実験中で、そこには四半世紀前と変わらない厳しいながらも淡々とした日常の研究室の姿が在り、何とも言えず感動しました。お2人とも日本の退職年齢はすでに迎えているはずなのですが、米国には日本と違いtenure（テニユア；終身在職権）制度があり厳しい審査にパスした研究者には定年がないのです。このまましばらく滞在し研究三昧の日々を送れたらなあと思いつつ帰国の途につきました。今回の出張は、いろいろな意味で私にとって思い出深いものとなりました。



NICHDの尾里研にて



同パネル参加者

俺の留学体験記



内科学第二講座
特任助教 鈴木 勇三

本コラムは『海の向こうから』ですが、今回は『海の向こうに行くところ』から始まります。呼吸器グループでは常時1〜2名が研究留学へ行っています。と言っても留学先は様々で、「行きたい人」が各自で留学先を探してきています。「それって大変？」と聞かれそうですが、「そうでもありません」でした。興味ある論文の著者や、Nature Jobs・研究留学ネットなどを調べて、履歴書(CV)とやる気をe-mailするだけ。CVの書き方は先輩が教えてくれます。ただmailしても「返事なし」や「今は空きがない」場合が多く、送信ボタンを押すたびに気持ちがすり減ります…。大分やる気が削がれた頃に、応募した研究室の一つから快諾の返事がありました。大学院時代の研究テーマとは近からず違からずでしたが、贅沢も言ってもらえません。受け入れてくれたのはロサンゼルスにある南カリフォルニア大学Akbari Lab、ポストドクが3人で、アレルギー・気管支喘息がテーマの小規模な研究室です。

LAは全米第二の都市ですが、NYと違って都会を感じさせない街です(田舎ともいう)。郊外に出しまえば、日本で見かけるようなマンションは殆ど見かけません。留学組は高級マンション・コンドミ



ラボメンバーと近くのワイナリーで。右から2番目が筆者、真ん中がボス。

ニウムには手が出ませんし、冒険的な地区には勇気がなく住めませんので、自ずと住居は限られてきます。当初は単身で渡米していたので、Skypeとメールを駆使して家族に部屋の詳細を説明して、築うん十年ですが通勤に便利で比較的静かな街のアパートメントに決めました。気に入ったのは中庭のプールとスプリングラーで生育されたヤシと庭木。子供は、5〜10月はほぼ毎日プールで遊びました。LAは一年を通して雨は殆ど降りませんので抜けるような青い空は平等ですが、高級住宅地ほどスプリングラーによって芝生や街路樹が整備され緑豊かな街になっています。ヒラタク言うところ「そこそこの街」に住み、おなじみのIKEAの家具で生活をスタートさせました。スターの御宅拝見にも行きました。

アメリカの食事に馴染めないと言う人もいますが、LAは日系スーパーもあり日本食も容易に手に入ります。DowntownのLittle Tokyoには居酒屋もあります。とは言っても、手巻き寿司は特別な日のごちそうです。夕食後のチョコアイスが悪しき習慣となり、Trader Joe'sやCostcoで調達しました。高級スーパーWhole Foodsとは縁がありませんでした。ステーキはBBQ



懐かしい我が家、ベランダから中庭を望んで。

より、ホットプレートで焼くと火加減が上手に美味しく焼けることを新発見!メキシコが近いこともありMexican foodsはpopularでタコス自宅でも手軽に作れます。おいしいアボガドのたっぷり入った味は懐かしく思います。

留学の主目的は研究ですが、「研究」ですから思うような結果が得られないことも間々あります。一方で見聞を広めること「ガス抜き」も大切です。子供は中庭のプールでストレス発散できますが、大人はHollywood signや豪邸を見に行くだけでは満足できません。余暇の過ごし方は研究と同じく計画的行います。もちろんアメリカまで様子を見にきた両親もアテにして企画します。「国立公園いいよ」とよく耳にしましたが「国立公園よかった」です。Grand CanyonやYellow Stone, Yosemiteなどの定番に加えてDeath ValleyやGraciers-Grand Tetonも穴場で楽しかったです。ただ山を歩き回るだけなのですが、行ったことない場所に行くのはワクワクしましたし、野生動物を間近で見る楽しさも経験しました。ぜひまた行きたいと思いますが…。気が弱いので2年で切り上げて帰国してしまいました。現在は『海の向こう』の学会に来年も行くために演題をヒネリ出しています。最後になりますが、稚拙な作文にお付き合いいただきありがとうございます。

海のむこうで

Beyond the Seas

イタリア、ミラノで学ぶ 小児医療と国際交流



医学部医学科6年
大瀧 悠嗣

「海外臨床実習」——それは入学以来私の憧れであり、目標でした。今回の留学で医学はもちろんのこと、地域の特色や文化を大いに感じる事が出来、素晴らしい経験をさせて頂きました。

今回私はミラノ市内のSan Paolo病院小児科にて一ヶ月の臨床実習をしました。San Paolo病院はミラノの医療の中核を担う病院の一つで、小児科に関してはアレルギー疾患や呼吸器・消化器疾患などといった一般的な領域はもちろんのこと、特に内分泌代謝異常に対して力を注いでいます。実際に、私もフェニルケトン尿症やヴィーガンという純菜食主義の習慣をもつ家庭で育った児に発症した低カルシウム血症など数々の症例を経験しました。中でも印象深い疾患はグルテンに対する自己免疫疾患のセリアック病です。セリアック病は欧米においては珍しくなく、イタリアにおいてもよく見られる疾患の一つです。近年のグルテンフリーの食品が注目を浴びている背景に、こういった実情がある事を知り驚きました。私は実習生として入院患者の身体診察を中心に、外来や小児科救急の見学をさせて頂きましたが、診察の際、拙いイタリア語で多くの子供とコミュニケーションを取れたことは非常に嬉しかったです。子供が好奇心旺盛で素敵な笑顔を持っていることは万国共通だと実感させられました。



健診に訪れた子供たちと

小児科の実習を通して私が感じたことが2点あります。1点目は女性医師の高比率です。San Paolo病院の小児科医師35名中、男性の数は4名と、約9割の小児科医師が女性でした。San Paolo病院に限らずイタリア全土でこの風潮があり、子供

とその両親に接する小児科に対して、女性的なイメージが伴っていることが要因の一つだそうです。



SCORA
(性と生殖・AIDSに関する委員会)

2点目は、学生が臨床に即した主体的な実習を行っているということです。私の実習期間中、現地の医学部6年次学生が3名いました。彼女らは患者を把握して紙カルテへの書き込みや問診及び診察をかなり主体的に行っており、小児救急の場面においても尿検査などの簡易的な検査を一任される場面があるなど、チームの一員として活躍している印象を受けました。イタリアでは3年次より臨床実習を開始するため日本よりも臨床実習の経験を積む期間が長いようです。臨床での知識だけでなく、業務に関する内容も含めて主体的に行動する術を学生時代から多く学べる点は非常に有意義だと感じました。

課外活動について

私は今回、国際医学生連盟(IFMSA: International Federation of Medical Students' Associations)のSCOPE(臨床交換留学に関する委員会)を利用して留学したため、私以外にもエジプト、中国、タイ、チリ、セルビアからの留学生がおり、彼らと多くの行動を共にしました。中でも印象深かったのは、IFMSAのSCORA(性と生殖・AIDSに関する委員会)への参加です。イタリアでは日本以上にセクシャルマイノリティーに対して寛容的であり、男性あるいは女性の象徴につい

て考えるものやそれぞれの価値観を発表しました。中には、宗教的な観点から否定的な意見もあり、価値観の違いを大きく感じさせられる意見が飛び交う貴重な場に参加することができました。



寮で出会った友人と



週末を利用して訪れたランペドゥーサ島で

総括

今回の留学で得られたものは多々ありますが、人々との繋がりはかけがえの無いものです。数々のアクティビティへの参加、ルームメイトによるエスプレッソについてのレクチャーなど、“When in Rome, do as the Romans do.”を座右の銘に、観光では得られない経験を多々することができました。また、私自身の語学力についても一ヶ月他国に身を置くことで一皮剥けたのではないかと思います。

最後に、この場をお借りして浜松医科大学国際交流後援会、多くの手続きをして頂いた学務課の方々及び素晴らしい機会を与えて下さった浜松医科大学に御礼を申し上げます。



留学生との交流

3月

3月12日(土)
入学者
選抜試験

平成28年度浜松医科大学入学者選抜試験(後期日程)を実施しました。



3月14日(月) 学位記授与式

平成27年度学位記授与式を行い、医学部182名(医学科118名、看護学科64名)、大学院医学系研究科博士課程23名、修士課程13名および論文博士9名に学位記を授与しました。

3月23日(水) 永年勤続者表彰式

永年勤続表彰式が行われ、永年にわたり医療並びに本学の教育に貢献された21名の方々に表彰状と記念品が授与されました。



平成28年度
4月

4月4日(月)～11日(月)
新入生オリエンテーション



新入生オリエンテーション(ガイダンス、健康診断、合宿研修、情報リテラシー、福祉施設体験学習など)を実施しました。

4月5日(火) 入学式

平成28年度入学式が行われ、医学部190名(医学科115名、医学科2年次編入学5名、看護学科60名、看護学科3年次編入学10名)、大学院医学系研究科博士課程29名および修士課程16名が入学しました。



4月8日(金)
Student Doctor
称号付与式

医学科5年次生117名に「Student Doctor」の称号を付与しました。



5月

5月13日(金)～14日(土)
滋賀医科大学
との交流会

本学において第41回滋賀医科大学との交流会が開催されました。本学は17種目中3勝9敗5引き分けで、通算成績は、14勝21敗6引き分けとなりました。



5月24日(火)
事務局職員SD(職能開発)研修

事務局職員を対象とし、管理運営や教育・研究支援までを含めた資質向上のための組織的な取り組みとして、山中和之事務局次長(総務・教育担当)による「平成28年度人事評価に係る事務局の目標」と題した講演を行いました。

5月28日(土)～7月18日(月)
東海地区国立大学体育大会

8大学による第65回東海地区国立大学体育大会(主管校:豊橋技術科学大学)が行われました。

■総合成績 男子7位、女子6位
優勝:サッカー
2位:硬式テニス(女子)
空手道(女子)

6月

6月6日(月)～17日(金) 授業開放

県内の高校生を対象に、平成28年度専門基礎科目等授業開放を実施しました。(参加者延べ522名)

6月7日(火) 開学記念行事・光先端医学教育研究センター開所式

開学記念日における記念行事を行いました。今野学長による挨拶の後、山梨大学大学院総合研究部医学域基礎医学系薬理学講座 小泉修一教授に「グリア細胞によるシナプス機能及び構造の制御」の題目で特別講演をしていただきました。また、名誉教授称号授与式、感謝状贈呈式を行いました。同日に光先端医学教育研究センター開所式を行いました。

名誉教授称号授与者
中村達氏(前学長)
小出幸夫氏(前理事・副学長)
鈴木修氏(前理事・副学長)
森則夫氏(前精神医学講座 教授)
感謝状贈呈者 病院ボランティア(5名)



7月

6月17日(金)
院内マジックショー

学生奇術部による院内マジックショーが行われ、患者さんとそのご家族の歓声や拍手で盛り上がりしました。

6月20日(月) 知財セミナー
「特許基礎ラウンド2016」

特許の基礎知識や、医学研究におけるラボノートの重要性和書き方、活用術について、職員を対象にセミナーを開催しました。

7月15日(金)
病院サマーコンサート

学生管弦楽団によるコンサートが行われ、患者さんやご家族などが来場しました。



7月16日(土)～30日(土)
公開講座(7/16、7/23、7/30)

「役に立つ最新医療のお話」をテーマに、第38回公開講座を開催しました。県内外から113名、延べ288名の方が受講しました。

7月20日(水) 若手研究者向け
「英語論文の書き方セミナー」

収集した論文情報を研究や論文執筆に活かす方法、論文投稿の仕方、文献管理の方法等、若手研究者向けの英語論文の書き方セミナーを附属図書館主催で開催しました。

7月22日(金)～8月15日(月)
富士山衛生センターの診療補助

富士山8合目に夏季期間中開設される、富士山衛生センターの診療補助者として、医学科4年生神村純さんほか6名が従事しました。

7月29日(水)
高校生1日ナース体験

市内の高校生約30人が「1日ナース体験事業」に参加しました。高校生は看護師のユニフォームに着替え入院患者の食事、着替えの介助などを行いました。将来の自分の仕事をイメージできる良い体験になりました。



8月

8月2日(火)・3日(水)
オープンキャンパス

医学科と看護学科のオープンキャンパス(大学説明会)を行いました。全国から延べ715人の高校生が参加し、カリキュラムの特徴、入学者選抜方法の説明、模擬授業、在学生・卒業生の講演、個別相談などを行いました。



9月

9月5日(月)
サイエンスのつどい

光先端医学が照らすサイエンスシリーズ第1弾として、生体機能イメージング研究室 尾内康臣教授による「生きているヒトの脳を覗いてみよう」と題したサイエンスのつどいを附属図書館で開催しました。

9月30日(金)
学位記授与式

大学院医学系研究科博士課程5名、論文博士5名に学位記を授与しました。



8月23日(火)～24日(水)
高大連携の実習プロジェクト
「極微な世界をのぞき見る」

静岡県立磐田南高等学校理数科2年生の5名が高大連携の実習プロジェクトに参加しました。高校生たちは、模擬授業や施設見学、再生・感染病理学講座で行われる各種の実験に参加しました。

8月16日(火) こころざし育成セミナー

医学部進学を目指す高校生約130名が「こころざし育成セミナー」に参加しました。松山病院長のあいさつの後、本学の3名の講師が、仕事の内容や医療の現状について説明しました。



8月6日(土)
地震防災訓練

「自らの安全を確保しつつ速やかに防災体制に移行するという一連の対応行動を身に付けること。職員、学生並びに附属病院における患者等の生命身体の安全を確保すること。」を目標に、政府訓練(大規模地震時医療活動訓練)と連携した地震防災訓練を行いました。



8月6日(土)～21日(日)
西日本医科学生
総合体育大会

第68回西日本医科学生総合体育大会(代表主管校:徳島大学医学部)が行われ、44大学が参加しました。

■総合成績20位
2位:空手道(女子)、ボート
3位:硬式テニス(女子)

サークル活動の記録

平成27年度(平成27年4月1日～平成28年3月31日)

準硬式野球部	●春季県内リーグ、東海地区国立大学体育大会、西日本医科学生総合体育大会、秋季県内リーグ 出場
男子硬式庭球部	●東海地区国立大学体育大会 1回戦敗退 ●東海リーグ 4部 3位 ●西日本医科学生総合体育大会 1回戦敗退 ●東海医歯薬大会 準優勝
女子硬式庭球部	●東海地区国立大学体育大会 3位 ●西日本医科学生総合体育大会 ベスト8 ●西日本メディカル学生大会 1回戦敗退 ●春季東海医歯薬大会 出場
ソフトテニス部	●春季東海医歯薬大会 出場、ダブルス 個人戦ベスト16 ●東海地区国立大学体育大会 出場 ●西日本医科学生総合体育大会 出場 ●秋季東海医歯薬大会 出場
女子バスケットボール部	●春季東海医歯薬大会 出場 ●五大戦 出場 ●西日本医科学生総合体育大会 出場 ●秋季東海医歯薬大会 出場
男子バレーボール部	●西日本医科学生総合体育大会 ベスト8
女子バレーボール部	●近畿医療系学生大会 ベスト16 ●日本医歯薬大会 ベスト16
バドミントン部	●春季静岡県大学バドミントン選手権大会 男子 1部 4位、2部 4位 女子 1部 3位 ●西日本医科学生総合体育大会 男子ダブルス ベスト16 女子ダブルス ベスト16 ●秋季静岡県大学バドミントン選手権大会 女子 1部 準優勝、2部 3位 ●東海医歯薬科大会 男子団体 ベスト8 男子シングルス ベスト16、ダブルス ベスト8 女子シングルス ベスト16、ダブルス 3位
サッカー部	●春季東海医歯薬大会 2回戦敗退 ●東海地区国立大学体育大会 準優勝 ●西日本医科学生総合体育大会 1回戦敗退 ●秋季東海医歯薬大会 3回戦敗退
剣道部	●中部医歯薬剣道大会 男子団体 優勝 女子団体 3位、女子個人 優勝 ●西日本メディカル学生大会 女子個人 3位 ●西日本医科学生体育大会 男子団体 決勝トーナメント進出 ●静岡県年代別剣道選手権大会 18才以上30才未満の部(女子) 個人 準優勝
空手道部	●東海地区国立大学体育大会 女子団体組手 優勝 ●西日本医科学生総合体育大会 男子団体 組手 ベスト16 女子団体 組手 優勝 女子個人 組手 準優勝、形 4位 ●西日本メディカル学生大会 女子団体 組手 優勝 女子個人 組手 準優勝 ●和道会東海空手道競技大会 女子個人 組手 優勝
ワンダーフォーゲル部	●富士山八合目の衛生センターにおける医療補助に従事
漕艇部	●朝日レガッタ 男子フォア 準決勝進出 ●中部学生選手権 男子フォア 優勝 男子ダブルスカル 2位 男子シングルスカル 準決勝進出 新人男子NK 優勝 女子クオドルブル 優勝 ●静岡県選手権競漕大会 男子フォア 優勝、2位 男子ダブルスカル 優勝 新人男子NK 優勝、2位 女子クオドルブル 優勝、準優勝 ●東海ブロック国体予選 女子クオドルブル 出場 ●西日本医科学生総合体育大会 男子フォア 優勝 男子ダブルスカル 3位 新人男子 2位、3位 女子クオドルブル 6位、11位(新人4位)
ゴルフ部	●西日本医科学生総合体育大会 男子団体 27位、個人 54位 女子個人 17位 ●春季西日本医歯薬オープン戦 個人 60位 ●関西国公立戦 個人 18位 団体 11位
弓道部	●中部ブロック医科学生弓道大会 男子団体 優勝、個人 5位、6位 女子A団体 優勝、女子B団体 優勝、個人 2位 ●東海地区国立大学体育大会 男子団体 3位 女子団体 準優勝、個人 準優勝、3位 ●静岡県下学生弓道選手権夏季大会 男子団体A 準優勝、個人 3位、4位 女子団体A 準優勝、女子団体B 3位、個人 準優勝、5位 ●西日本医科学生総合体育大会 男子団体 優勝、個人 準優勝、優秀者技賞 女子団体 優勝、個人 4位 ●全日本医科学生体育大会王座決定戦 団体3位、個人9位、10位 ●東海医歯薬大会 男子団体 3位 女子団体A 準優勝、女子個人 4位 ●静岡県下学生弓道選手権春季大会 男子団体B 準優勝、団体G 3位、個人 3位 女子個人 準優勝、4位、5位

陸上競技部	●静岡県西部陸上競技選手権大会 男子 400mハードル 3位、ハンマー投げ 2位 ●関西医科学生対校陸上競技選手権大会 男子 砲丸投げ 3位 女子 走り高跳び 3位、走り幅跳び 3位 ●東海地区国立大学体育大会 男子 ハンマー投げ 優勝、2位 ●西日本医科学生総合体育大会 男子 400mハードル 2位、男子砲丸投げ 2位、ハンマー投げ 優勝 女子 ハンマー投げ 優勝、女子円盤投げ 3位 ●全日本医歯薬獣医学対抗陸上競技選手権大会 女子 走り幅跳び 3位 ●天皇賜盃日本学生陸上競技対校選手権大会 女子 棒高跳び 出場 ●関西医歯薬科学生対校陸上競技大会 男子 400mハードル 優勝 女子 走り高跳び 3位、走り幅跳び 3位 ●浜松市民スポーツ祭陸上競技大会 女子 走り幅跳び 優勝
水泳部	●西日本医科学生総合体育大会 男子 100m 平泳ぎ 個人 1位、2位 男子 200m 平泳ぎ 個人 1位、2位 女子 50m バタフライ 個人 2位 女子 100m バタフライ 個人 1位 ●西日本メディカル学生大会 女子 100m 平泳ぎ 個人 2位 女子 200m 自由形 個人 2位 女子 400m 自由形 個人 1位 ●東海地区国立大学体育大会 男子 100m 平泳ぎ 個人 2位 男子 200m 平泳ぎ 個人 3位 女子 50m 平泳ぎ 個人 1位
卓球部	●西日本医科学生総合体育大会 参加 ●西日本医歯薬学生卓球大会 ダブルス ベスト32、シングルス ベスト32 ●東海医歯薬大会 参加
合気道部	●長期休暇時の合同稽古、昇級・昇段審査
美術部	●各自作品づくりをし、医大祭、静岡県西部学生美術展にて展示 ●医大祭用巨大看板づくり、ポスターづくり ●不定期で美術館巡り ●他部活のポスターづくり
茶道部	●医大祭にてお茶会を開催
邦楽部	●裏千家東海地区大会 参加
四つ葉	●月に3回外部講師による等のお稽古 ●天竜厚生会清明寮での学習支援ボランティア ●浜松筋ジストロフィーの会への参加 ●自閉症の患者さんと家族から成り立つ「はばたくあひるの会」との交流 ●車イスの方の会「集まる会」との交流、車イス介助 ●天竜病院児童精神科でのボランティア ●本学附属病院小児科主催の糖尿病サマーキャンプ参加 ●浜松市「青少年の表彰」善行賞受賞 ●浜松医科大学学生表彰
軽音部	●月に一度の月例ライブの開催 ●新歓ライブ、クリスマスライブなどの学食ライブの開催 ●医大祭でのライブ ●卒業生ライブの開催 ●その他、他大学との交流ライブ
管弦楽団	●第35回定期演奏会(アクトシティ 中ホール) ●本学附属病院、浜松日本赤十字病院及び遠州病院でのサマーコンサート ●本学入学式、学位記授与式、解剖体慰霊祭における演奏 ●医大祭での演奏会
写真部	●医大祭写真展示 ●週に1度、撮影会
東洋医学研究会	●東百会への参加 ●他大学東洋医学研究会との交流会
奇術部	●本学附属病院マジックショー ●本学にて新歓マジックショーを実施 ●浜松科学館イベント(マジックショー) ●福祉施設(デイサービスまりも)でのマジックショー ●医大祭にてマジックショー実施
つながり	●若宮保育園、みどり保育園にて保健指導を実施 ●本学における家庭教師ボランティア活動 ●医大祭での展示・子どもたちに「お医者さん体験」をしてもらう模擬診察を実施 ●ゆずりは学園、西遠女子学園でのピアエデュケーション ●レインボーフラッグプロジェクトへの参加
囲碁将棋部	●中部春季個人戦 ベスト16
HOPE	●留学生(IFMSA)の受け入れ ●LTP(基礎研究留学担当トレーニングプログラム)参加 ●上海交通大学からの留学生案内・交流 ●留学での研修参加(フィンランド、ポルトガル、フランス、イタリア) ●国際交流のついでに参加
うなぎの会	●南相馬訪問合宿報告会 ●プレゼンテーションWS ●全国医学生ゼミナール参加 ●野鷲三方原病院 災害訓練へ模擬患者として参加 ●しずめでい、主催 社会人×学生交流会への参加 ●地域医療研究会全国大会2015への参加 ●医大祭にて救急医療に関する展示を実施 ●被災地訪問合宿
災害支援サークル Luce	●学生ボランティアの派遣協力 ●東区災害ボランティアコーディネーターとの交流 ●静岡県民病院長の防災訓練に学生ボランティアを派遣協力 ●日本東洋災害医学会総会 ポスター発表 ●本学地震防災訓練に学生ボランティアとして参加
シミュレーション 研究会	●Peer learning(学生主導のシミュレータ指導) ●親子セミナー ●医学教育学会でのポスター発表

軽音楽部

Band

設立

1997年設立

部員数

42名

活動日程

各バンドごと自由



自由に音楽を楽しむ!!

こんにちは!軽音楽部です!私たちは定期的な練習ではなく、部員同士で自由にバンドを組み、バンドのメンバーで練習日を決めて練習しています。

学内でのライブは定期的開催され、月に一度部室で行う月例ライブ、学食で行う新歓ライブ、クリスマスライブ、体育館のステージで行う医大祭ライブなど多くあります。他にも外のライブハウスでのライブに出演し、他大学の軽音楽部と交流することもあります。ライブは演奏して



医学部医学科3年

田尻 智也

CLUB
Introductions
サークル紹介

女子硬式テニス部

Women's Tennis

設立

1974年設立

部員数

24名

活動日程

前期:週3(月・木・土)、後期:週2(木・土)



こんにちは、浜松医科大学女子硬式テニス部です。私たち女子硬式テニス部は、前期は月曜、木曜、土曜の週3回、後期は木曜、土曜の週2回で活動しています。テニスコートは5面あり、今年の春にコートの全面張替えやコート内の備品を一新していただいたのでとても良い環境で部活動を行っています。長期のオフもあるので、文武両道を目指す方にもおすすめの部活です。部員は24人で、1年生から6年生まで一緒に練習をしています。コーチも練習に来ていただいているので、コーチの指導を受け、テニス経験者はもちろん初心者も上達しています。

いる人も観ている人も一体となって盛り上がります。

音楽はジャンルを問わず、ロックやJ-POP、アニソンなど様々で、自分たちの好きな音楽をやることができます。軽音楽部は楽器の経験者ばかりではなく、大学から楽器を始めている人も多くいます。そして、部員の多くは他の部活と兼部している人がほとんどで、他の部活で体を動かしながら、軽音学部で音楽も自由に楽しみたいという人が多いです。部員全員で音楽の楽しみを自由に共有できるところが軽音楽部の醍醐味です。

初心者の方も経験者の方も軽音楽部に興味を持った方は是非、ライブなどに遊びに来てください。一緒に音楽を楽しみましょう!



留学生の紹介

浜松医科大学の有能な医師や学生と共に
切磋琢磨したいと思います。

International Student Introduction

大学院医学系研究科(博士課程)2年 整形外科講座

Nguyen Nguyen Thai Bao
(グエン・グエン・タイ・バオ)

出身国
ベトナム



Research theme

I am now a second year Doctoral Degree Student at the Department of Orthopedics Surgery, studying and researching under the supervision of Prof. Yukihiro Matsuyama and Assoc. Prof. Hironobu Hoshino. My major is joint surgery with a specialization in hip arthroplasty and arthroscopy. Within the first year at HUSM, I have already finished my first research focusing on the hip parameters and their clinical application in osteoporosis status diagnostic in elderly patients. I am currently working on the second research concerning the use of 3D imaging in analyzing and simulating hip joints dynamically in the currently interesting hip disease: femoral acetabular impingement.

What did you study before coming Japan?

I graduated from Hue University of Medicine and Pharmacy (HUMP), Vietnam in 2011 and took the residency rotation while working as a lecturer at the Department of Orthopedics Surgery, HUMP hospital from 2011 to 2013. In 2014, I took a 6 months course for medical graduates at Kaplan Medical, Auckland, New Zealand. At the end of 2014, I received the scholarship from the American Academy of Orthopedic Surgeon (AAOS) for a short-term training course specialized in hip arthroplasty at Mayo Clinic, Minnesota, USA.

Your original country

I come from Hue city, located in central Vietnam on the banks of Perfume River, just about 10km inland from the

研究テーマを教えてください。

私は現在、浜松医科大学博士課程2年生です。整形外科に所属して松山教授、星野准教授のもと医学の勉強と研究を行っています。私は関節外科医であり、特に股関節鏡手術、人工股関節置換術を専門にしています。日本に来て最初の1年は高齢者における股関節パラメータの骨粗鬆症診断への応用という研究を行いました。現在は2つ目のテーマである、femoral acetabular impingement (FAI)患者における3D画像を用いた股関節シミュレーションという研究を行っています。

日本に来るまでは

どこでどんな勉強をしていましたか？

私はベトナムのHue University of Medicine and Pharmacyを2011年に卒業し、同病院で整形外科のレジデントとして3年間働きました。その後、2014年にニュージーランドのKaplan大学で6か月の卒業医学教育を受けました。2014年末にはAmerican Academy of Orthopedics Surgeonのスカラシップを利用してミネソタのMayo clinicで人工股関節手術のトレーニングを受けました。

ベトナムについて教えてください。

私の出身地であるフエ市はベトナムの中央でフォン川のほとりに位置し、海からは10kmほど離れてい

East Sea. Being the capital city of Vietnam for approximately 150 years during feudal time, the city is well known for its historic monuments, especially the Imperial city and tombs of several emperors, which have earned it a place in UNESCO's World Heritage Sites. A number of French-style buildings, the oldest high school in Vietnam and a large number of pagodas are among great places of interest in the city. Hue's royal style food and customs are also attractive to lots of foreigners during their time travelling to Vietnam.

Why did you choose HUSM?

In my three years time working as a surgeon, I gained lots of clinical experience in orthopedics surgery. Especially, I had the opportunity to participate in orthopedics conferences and training courses held by international delegations from AAOS-USA, Australia, Germany... I soon realized the big gap between developed and developing countries in every point of orthopedics surgery, from technical to clinical issues. These facts encouraged my idea of getting more training and researching in highly developed country's universities oversea.

By reading articles published by HUSM, I was influenced by the multiple way addressing various joints issues from clinical, biochemical levels to radiographic and diagnostic imaging views. I was also really excited to have a chance to meet Dr. Hironobu Hoshino who specialized in hip surgery and I found his work was closest to what I wanted to pursue for my doctoral degree. During the time

contacting Dr. Hoshino, I appreciated his kind and enthusiastic help and I realized HUSM was a place of competitive and collaborative environment with hundreds of talented professors, doctors and students and I did hope to integrate myself with the whole academically challenging system at HUSM.

How is your life in HUSM?

It is my great honor to have such a great opportunity to work and do research with famous and talented Japanese doctors in the department, who are not only extraordinary orthopedists but also affable and enthusiastic teachers. I was warmly welcomed and affectionately guided from the very first day coming to HUSM. This has helped me finish my first research within my first year in HUSM and got accepted for the oral presentation at the Japanese Orthopedics Association Annual Meeting in 2016. Besides studying, I have also joined the school's badminton club and had wonderful time with other Japanese medical students by practicing and participating in several tournaments under HUSM uniform. The kindness of all the doctors, staffs and students at HUSM, along with Hamamatsu's peaceful and beautiful landscape brings me enjoyment, comfort and unforgettable memories in my everyday life in Japan.



浜松医科大学での研究を選んだ理由は？

臨床医として働いた3年間のなかで整形外科医としてたくさんの経験を得ることができました。特に、国際派遣として参加したアメリカ、オーストラリア、ドイツなどでのカンファレンスや手術実習の経験は貴重なものでした。そこで私は先進国と発展途上国の技術的・学問的な医療格差を実感しました。これらの経験が私をより高いレベルでの海外留学へと駆り立てました。浜松医科大学から発表された論文を拝読し、関節疾患に対して臨床的、生化学的、X線学的という多方面からアプローチをしていることに感銘を受けました。股関節専門医である星野准教授と直接お会いして、私の関心のある分野を研究されていることでさらに興味がわきました。星野先生のやさしさと熱心な御助力には大変感謝しています。浜松医科大学には多くの有能な医師や学生が互いに切磋琢磨しており、私もその中に身を投じてみたいと思うようになりました。

浜松医科大学での生活はどうか？

親しみやすく熱心で、優秀な日本の先生方と仕事や研究ができる機会を与えていただいたことに感謝します。皆さんが初日から私を温かく向かい、優しく導いてくださいました。おかげさまで最初の研究を初年度で終えることができ、日本整形外科学会学術集会にて口演発表することができました。勉強以外ではバドミントン部に所属し、いくつかの試合に浜松医科大学のユニフォームを着て参加し、学生とともに素敵な時間を過ごさせていただいています。浜松医科大学に所属する先生、スタッフ、学生の皆様のやさしさ、平和で美しい浜松の景色のおかげで、日本で暮らす毎日が私にとっては楽しく、忘れられない思い出となっています。



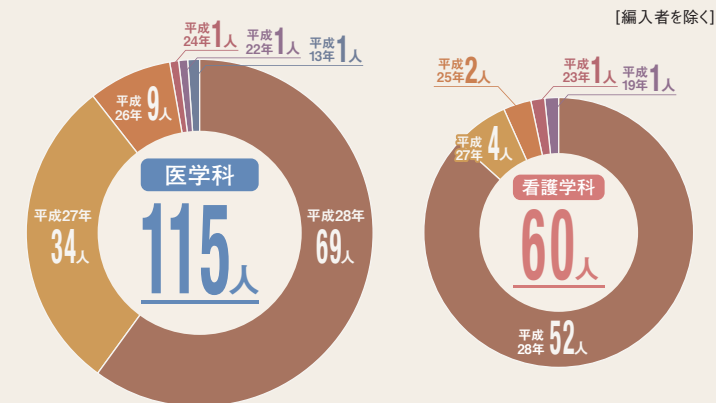
平成28年度 入学者選抜試験実施状況

入学者選抜試験実施状況

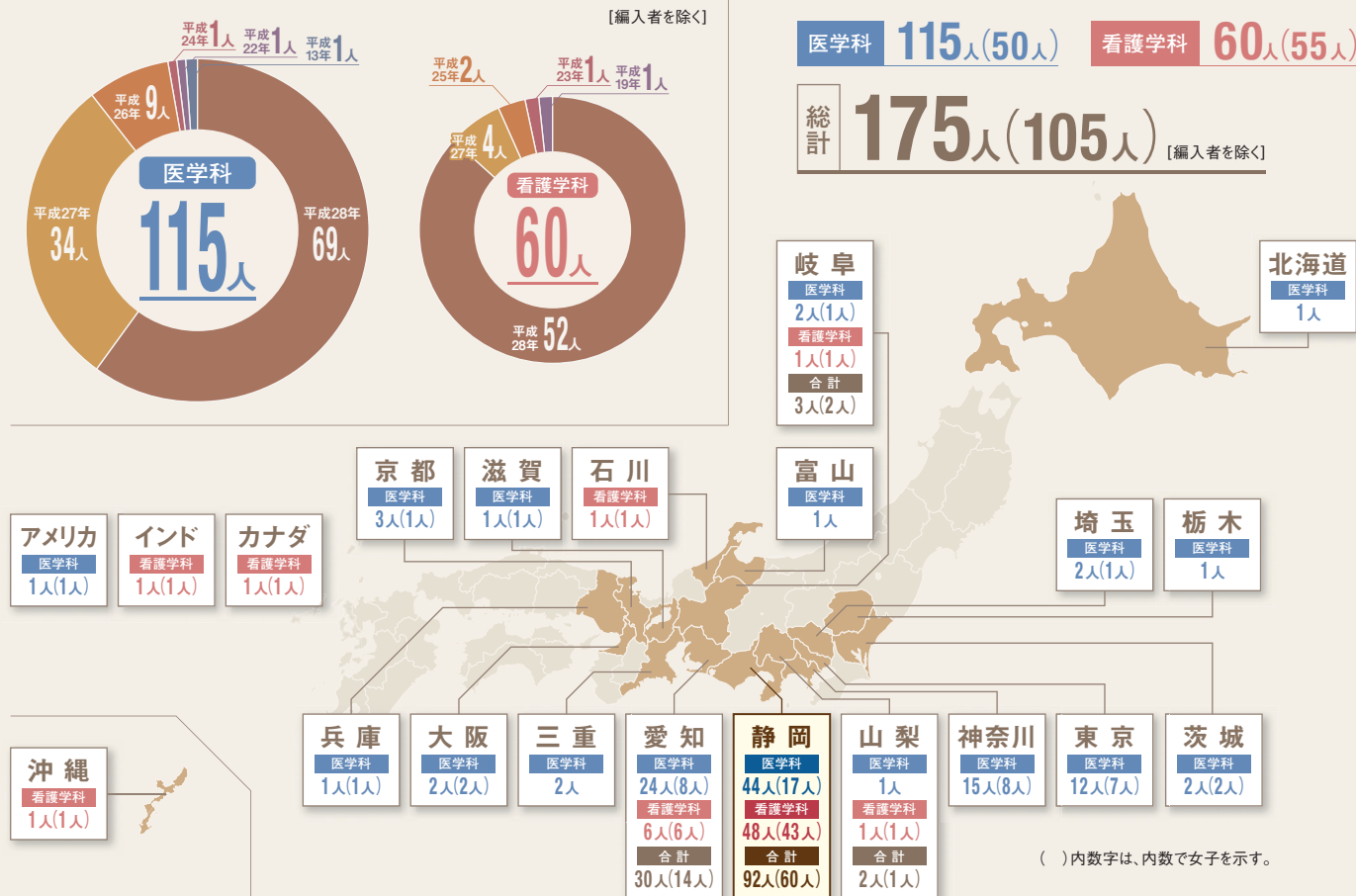
学科名	区分 [募集人員]	志願者数	第1段階選抜合格者数	受験者数	合格者数	入学辞退者数	追加合格者数	入学者数
医学科	前期日程 [75]	603 (244)		526 (212)	75 (28)	2 (1)	0 (0)	73 (27)
	後期日程 [10]	314 (123)	150 (58)	50 (20)	10 (8)	2 (1)	3 (2)	11 (9)
	推薦入試 [30]	92 (49)		91 (48)	30 (13)	0 (0)	0 (0)	30 (13)
	帰国子女 [若干名]	12 (7)		11 (6)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	1 (1)
	私費外国人 [若干名]	0 (0)		0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
	合 計 [115]	1021 (423)		678 (286)	116 (50)	4 (2)	3 (2)	115 (50)
	2年次編入学 [5]	149 (42)	40 (6)	24 (3)	5 (0)	1 (0)	1 (1)	5 (1)
看護学科	前期日程 [35]	72 (62)		68 (59)	35 (30)	3 (2)	2 (1)	34 (29)
	推薦入試 [25]	44 (43)		44 (43)	22 (22)	0 (0)	0 (0)	22 (22)
	帰国子女 [若干名]	2 (2)		2 (2)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	2 (2)
	社会人 [若干名]	6 (6)		5 (5)	2 (2)	0 (0)	0 (0)	2 (2)
	合 計 [60]	124 (113)		119 (109)	61 (56)	3 (2)	2 (1)	60 (55)
	3年次編入学 [10]	42 (31)		42 (31)	10 (8)	3 (3)	3 (2)	10 (7)

()内数字は、内数で女子を示す。

高等学校等卒業年別入学者状況



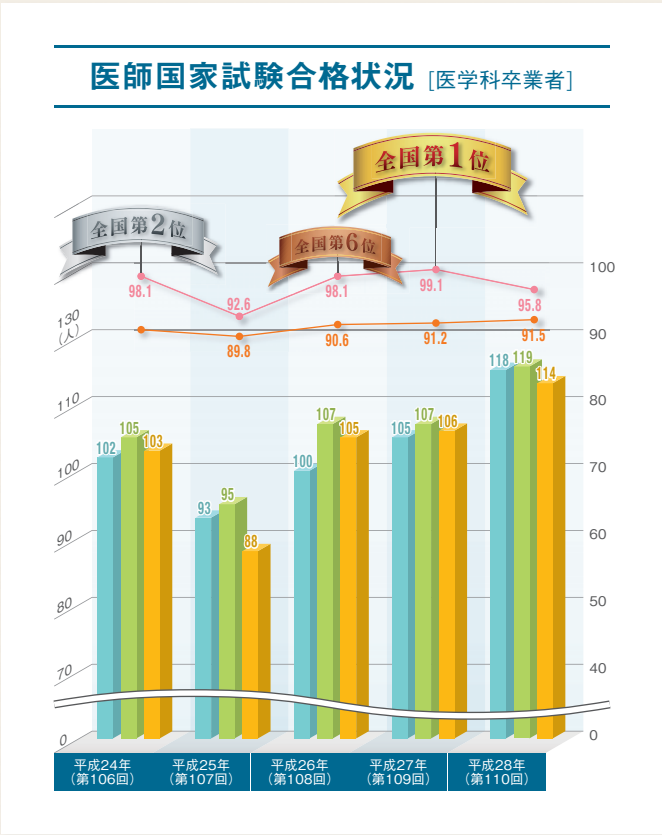
出身高等学校等所在都道府県別入学者状況



()内数字は、内数で女子を示す。

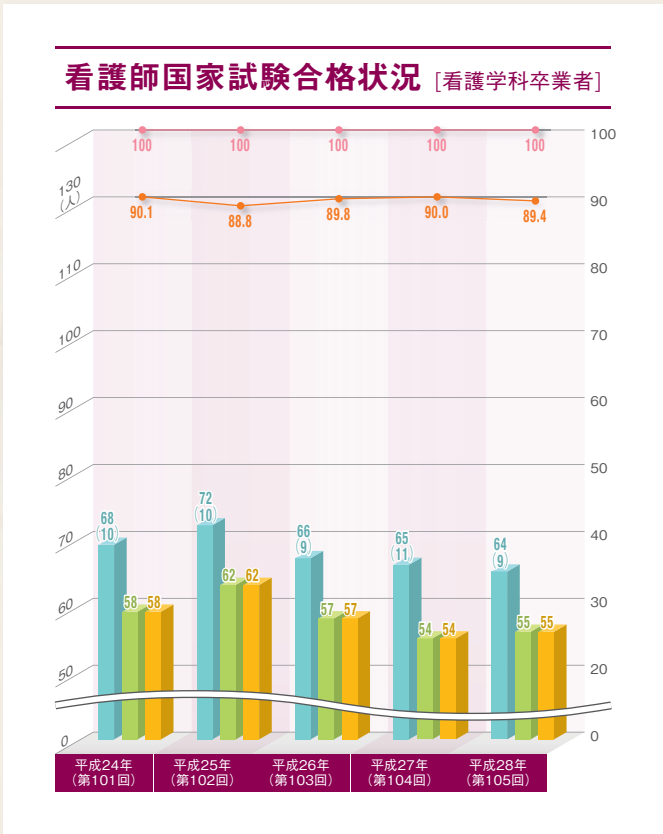
国家試験合格状況

第110回医師国家試験大学別合格状況



順位	学校名	受験者数	合格者数	合格率
1	和歌山県立医科大学	109	108	99.1%
1	自治医科大学	115	114	99.1%
3	東京医科大学	134	132	98.5%
4	順天堂大学医学部	110	108	98.2%
4	東京慈恵会医科大学	110	108	98.2%
6	横浜市立大学医学部	90	88	97.8%
7	日本大学医学部	120	117	97.5%
8	福島県立医科大学	107	104	97.2%
9	千葉大学医学部	119	115	96.6%
10	札幌医科大学	104	100	96.2%
11	佐賀大学医学部	101	97	96.0%
11	名古屋市立大学医学部	75	72	96.0%
13	浜松医科大学	119	114	95.8%
13	大阪市立大学医学部	96	92	95.8%
15	東北大学医学部	128	122	95.3%
16	兵庫医科大学	105	100	95.2%

順位	学校名	受験者数	合格者数	合格率
17	山形大学医学部	136	129	94.9%
18	東邦大学医学部	115	109	94.8%
19	島根大学医学部	114	108	94.7%
20	藤田保健衛生大学医学部	109	103	94.5%
21	金沢大学医学部	124	117	94.4%
21	大阪大学医学部	124	117	94.4%
23	大阪医科大学	106	100	94.3%
24	日本医科大学	103	97	94.2%
25	筑波大学医学専門学群	118	111	94.1%
25	東京医科歯科大学医学部	102	96	94.1%
27	秋田大学医学部	128	120	93.8%
27	山梨大学医学部	129	121	93.8%
27	慶應義塾大学医学部	112	105	93.8%
30	金沢医科大学	105	98	93.3%
31	弘前大学医学部	130	121	93.1%
32	新潟大学医学部	142	132	93.0%
33	京都府立医科大学	113	105	92.9%



順位	学校名	受験者数	合格者数	合格率
34	京都大学医学部	111	103	92.8%
35	滋賀医科大学	123	114	92.7%
35	埼玉医科大学	124	115	92.7%
37	広島大学医学部	122	113	92.6%
38	岡山大学医学部	125	115	92.0%
39	山口大学医学部	135	124	91.9%
40	徳島大学医学部	108	99	91.7%
40	昭和大学医学部	121	111	91.7%
42	長崎大学医学部	119	109	91.6%
43	名古屋大学医学部	116	106	91.4%
44	群馬大学医学部	114	104	91.2%
44	富山大学医学部	114	104	91.2%
44	三重大学医学部	136	124	91.2%
47	旭川医科大学	135	123	91.1%
47	川崎医科大学	124	113	91.1%
49	産業医科大学	111	101	91.0%
50	鳥取大学医学部	108	98	90.7%

順位	学校名	受験者数	合格者数	合格率
51	北海道大学医学部	114	103	90.4%
51	近畿大学医学部	104	94	90.4%
53	宮崎大学医学部	112	101	90.2%
53	東京女子医科大学	123	111	90.2%
55	防衛医科大学校	81	73	90.1%
56	福井大学医学部	109	98	89.9%
57	琉球大学医学部	128	115	89.8%
58	熊本大学医学部	117	105	89.7%
58	大分大学医学部	116	104	89.7%
58	奈良県立医科大学	116	104	89.7%
61	神戸大学医学部	115	103	89.6%
62	香川大学医学部	113	101	89.4%
63	東京大学医学部	122	109	89.3%
63	聖マリアンナ医科大学	112	100	89.3%
65	愛媛大学医学部	129	115	89.1%
66	岐阜大学医学部	118	105	89.0%
67	愛知医科大学	114	101	88.6%

順位	学校名	受験者数	合格者数	合格率
67	関西医科大学	123	109	88.6%
69	獨協医科大学	122	108	88.5%
69	北里大学医学部	122	108	88.5%
71	信州大学医学部	124	109	87.9%
71	高知大学医学部	124	109	87.9%
73	東海大学医学部	122	107	87.7%
74	福岡大学医学部	120	105	87.5%
75	九州大学医学部	114	99	86.8%
76	杏林大学医学部	98	85	86.7%
77	鹿児島大学医学部	113	97	85.8%
78	帝京大学医学部	128	109	85.2%
79	久留米大学医学部	138	117	84.8%
80	岩手医科大学	127	107	84.3%
81	認定及び予備試験	118	63	53.4%
総合計		9,434	8,630	91.5%



浜松医科大学附属病院勤務
 看護学科18期生(平成28年3月卒業) 渡邊 里緒／塩澤 幸史

看護学科				卒業者 64人			
就職先等	内 訳	人数	(人)	就職先等	内 訳	人数	(人)
本学附属病院	浜松医科大学医学部附属病院	15	15	その他病院	すずかけセントラル病院	1	10
国立大学 附属病院	東京大学医学部附属病院	2	5		聖隷三方原病院	1	
	名古屋大学医学部附属病院	2			聖隷浜松病院	1	
	京都大学医学部附属病院	1			静岡赤十字病院	1	
	名古屋国立大学附属病院	1			静岡済生会総合病院	1	
公立大学病院	名古屋市立大学附属病院	1	2		医療法人社団 青虎会フジ虎ノ門整形外科病院	1	
	横浜市立大学附属市民総合医療センター	1			医療法人大社会 久喜すずのき病院	1	
私立大学病院	日本医科大学付属病院	1	2		横浜市立みなと赤十字病院	1	
	北里大学病院	1			社会福祉法人親善福祉協会国際親善総合病院	1	
国立病院等	国立成育医療研究センター	1	1	医療法人横浜柏堤会戸塚共立第2病院	1		
公立病院	静岡県立総合病院	7	17	国・県・市・ 健診センター	浜松市保健師	1	3
	静岡県立静岡こども病院	1			島田市保健師	1	
	静岡県立静岡がんセンター	1			静岡市保健師	1	
	静岡県立静岡病院	1		企業	プライムアースEVエナジー株式会社	1	3
	藤枝市立総合病院	1			スズキ株式会社	1	
	豊川市民病院	1			本田技研工業(株)浜松製作所	1	
	豊橋市民病院	1		進学	浜松医科大学大学院助産学養成コース	2	5
	公立陶生病院	2			聖隷クリストファー大学助産学専攻科	3	
	大垣市民病院	1		その他	浜松医科大学医学部看護学科 教務補佐員	1	1
	横浜市立市民病院	1					

合計 64

賞の名称	受賞年月日	受賞者	受賞内容(研究題目)
第11回日本医学シミュレーション学会 最優秀演題賞	平成28年 1月31日	手術部 助教 木村 哲朗	超音波診断装置を用いた下肢屈曲による 大腿静脈径変化の検討
第2回血管生物若手研究会 血管生物医学若手優秀賞	平成28年 3月5日	解剖学講座 (神経機能学分野) 助教 山岸 寛	The role of FLRT2, a new axon guidance molecule, in development of the vascular systems
日本薬学会第136年会 優秀発表賞	平成28年 3月28日	薬剤部 薬剤師 吉川 望美	血漿中プレガバリン濃度の迅速測定法の開発と その神経障害性疼痛患者への適用
第113回日本内科学会総会・講演会 医学生・研修医の「日本内科学会 ことはじめ 2016東京」優秀演題賞	平成28年 4月16日	医学部医学科4年 大野 航	医療事故報道の臨床研修マッチングに及ぼす影響
日本輸血・細胞治療学会 村上記念奨励賞	平成28年 4月28日	輸血細胞治療部 臨床検査技師 山田 千亜希	Introduction of point-of-care testing and intervention in the transfusion unit decreases perioperative bleeding, shortens operative time and facilitates appropriate dosage of blood transfusions
平成28年度静岡産科婦人科学会 春季学術集会 奨励賞	平成28年 5月29日	周産母子センター医員 福地 千恵	大きな子宮筋腫子宮に対する、腹腔鏡補助による整容性 を考慮した腹式子宮全摘術(Laparoscopic-assisted Laparotomy Hysterecotmy: LALH)
第7回日本プライマリ・ケア連合学会 地域ケアネットワーク特別賞	平成28年 6月12日	医学部医学科4年 本間 侑	独居高齢者の社会的交流に関する質的研究
第31回日本顕微鏡学会 論文賞 応用研究(生物) Biomedicine	平成28年 6月15日	先進機器共用推進部 技術専門員 太田 勲 総合人間科学講座(生物学) 特任助教 高久 康春 総合人間科学講座(生物学) 教授 針山 孝彦	Dressing living organisms in a thin polymer membrane, the NanoSuit, for high-vacuum FE-SEM observation
日本静脈学会 YIA賞	平成28年 6月23日	医生理学講座 助教 田中 宏樹	リンパ還流不全による静脈壁ならびに静脈周囲組 織変性についての実験的検討
日本弱視斜視学会 第36回学会賞(廣石賞)	平成28年 6月24日	眼科 非常勤医師 澤田 麻友	Characteristics and surgical outcomes of consecutive exotropia of different etiologies
第5回日本DOHaD研究会 学術集会 優秀ポスター賞	平成28年 7月24日	神経生理学講座 技術補佐員 王 天英	Prenatal stress causes loss of GABAergic interneurons and PNNs in mPFC of GAD67-GFP knock-in mouse.

山崎昇名誉教授、国際心臓血管学会Lifetime Achievement Awardを受賞

山崎 昇 名誉教授(第4代学長)が、これまでの心臓血管研究に関する業績が認められ、国際心臓血管学会(International Academy of Cardiovascular Science)の「Lifetime Achievement Award in Cardiovascular Science, Medicine and Surgery」を受賞しました。





◀心室頻拍のアブレーション中。助手は浜松医大同期の高宮先生です。

▼職場の集合写真。とても働きやすい環境です。



卒業生は今

救命処置の訓練デモの様子▶



▼子供との写真



さいたまの地で、浜松医科大学の卒業生として

医学科27期生
(平成18年3月卒業)
稲村 幸洋

皆様こんにちは。私は2006年3月に浜松医科大学を卒業し、川口市立医療センターの初期研修を経て、東京医科歯科大学循環器内科医局に入局、大学での一年間の後期レジデントを経験したのち、青梅市立総合病院、横浜南共済病院を経て、2014年6月から現在のさいたま赤十字病院で循環器科医師として勤務しております。

私は学生時代から救急医療に憧れており、そのため救急疾患を多く勉強できる地元の病院で研鑽を積みたいと考え研修病院を選択しました。急性期医療に携わる中で、内科疾患の急性期医療の重要さと魅力に取りつかれ、最も内科急性期を経験できる循環器内科を選択しました。循環器内科医になりたてのころは虚血性心疾患に対するカテーテル治療に多くの時間を注ぎましたが、現在は主に不整脈に対するカテーテルアブレーションを中心に行っております。今回は少し私の専門領域の紹介をしたいと思います。

不整脈と一概に言っても様々な種類が存在します。心房細動などの心房起源の不整脈や心室頻拍などの心室起源のものなど、多くの不整脈は今まで薬が主な治療法でした。しかしここ10年程度で治療法は劇的に変化を遂げ、現在多くの不整脈においてカテーテルでの治療が可能に

なっています。特に心房細動は脳梗塞のリスクとなるため、多くの施設で積極的にアブレーション治療を取り入れております。現在所属しているさいたま赤十字病院循環器科は特に不整脈診療に力を入れており、最新の治療である心房細動に対する冷凍バルーンを用いたクライオアブレーションという治療を積極的に取り入れ、現時点で全国トップの件数を誇っております。この治療は心房細動のアブレーションを早ければ1時間半程度で行うことが可能となり、患者さんの負担軽減にもつながります。現病院はカテーテル室が2室(うち1室は他科と共用)しかないため、しばしば帰宅が遅くなることもありますが、クライオアブレーションを導入後は比較的終了時間も早くなり体力的にも大変助かっております。2017年1月には病院がさいたま新都心駅前に移転します。今後さらに患者数の増加が予想され忙しさも増すでしょうが、新しい病院で気持ちを新たに頑張っていきたいと思っております。

不整脈領域は浜松医科大学卒業生が多く活躍している領域でもあります。当院でもつい最近まで2003年卒の林達哉先生が在籍しており、また現在は大学の同期である高宮智正先生と一緒に不整脈治療に携わっております。他施設においても多くの浜松医科大学卒業生が第一線で活躍

されております。このように浜松医科大学の卒業生であることを誇りをもって活躍できる領域でもあることは大変魅力的であると考えております。

医者になってから時間の経過はあっという間で、私もいつのまにか新しい家庭を持ち一家を支える立場となりました。これからは自分の健康にも気をつけ、家族を支えていかないとはいけません。私は卒業後浜松という土地からは離れてしまいましたが、浜松医科大学の卒業生であることを胸にこれからも頑張っていきたいと思っております。



▲2人の娘たち。子供たちの笑顔に癒されます。



クリティカルケア看護の可能性

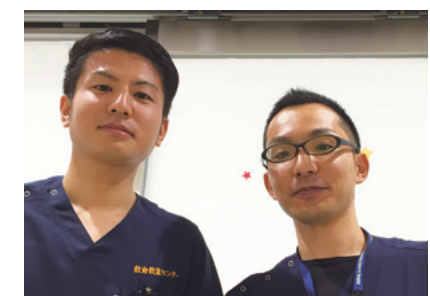
看護学科11期生
(平成21年3月卒業)
増田 喜昭

皆さん、こんにちは。私は2009年3月に浜松医科大学を卒業し、5年間順天堂大学医学部附属静岡病院の救命センターで勤務後、2014年4月からは聖隷浜松病院のICUでの勤務に並行して、浜松医科大学大学院医学系研究科修士課程(看護学専攻)に入学し、急性・重症患者看護専門看護師の資格取得を目指して忙しくも充実した毎日を送らせていただいております。

学部生時代には看護師になることに疑問を感じ、医師に憧れを抱いたこともありましたが、一緒に悩み励ましてくれた3人の同級生に支えられ、救命に携わりたいという初心に帰り、看護師としてクリティカルケア領域に身を投じる覚悟が出来ました。3人の同級生とは今でも親交が深く、仕事を始めてからも幾度となく励まされてきましたし、家族を巻き込んだ食事会や宿泊会を定期的に行なうなど、仕事と私生活、共に私にとってよい影響を与えて続けてくれています。また、妻の間には先日2人目の子供も授かり、仕事と大学院の傍ら2児の父としての役割を家庭でも与えてもらうことが出来ました。ご想像の通り、確かにイライラしたり、疲れてしまうことも多々あります。しかしそれでも決して嫌だと思わないのは、クリティカルな状況にある患者様やそのご家族との

関わりによって、私自身の何気ない日常が如何に幸せなことなのかを実感させてくれているからだと思っています。そしてまたそれは、私に自己研鑽をする動機を与えてくれ、クリティカルな状況にある患者様とそのご家族に対するより一層のケアへと繋げてくれます。クリティカルケア領域では看護が可視化されにくい現状を訴える方々もいますが、私自身は最近ではそれらの気付きによって、確かにクリティカルケア領域にもケアリングが存在する事を自覚する事が出来るようになりました。

ところで、クリティカルケア領域では近年PICS (Post Intensive Care Syndrome)と呼ばれる概念が提唱されるなど、救命を越え、その後の患者様とそのご家族のQOLにまで目が向けられるようになってきています。つまり私たちクリティカルケア看護師が患者様を見る際、ICUでの状態のみをモニタリングすればいいのではなく、今までどのような人生を歩んできたのか、そして今後どのような人生を歩んでいくのかといった所にまで自分のケアの中に患者様を落とし込めなければなりません。またそうすることで、例えば鎮静剤や原疾患の作用等によってコミュニケーションがとれず単にベッドに横たわっている患者様であっても、1人の人として自然に声をかける事ができるようになる



▲同期の田中智樹君と

特別講演

光医学教育シリーズ (光医学教育研究拠点形成事業)

平成28年6月7日(火)、本学臨床講義棟大講義室にて、浜松医科大学開学記念日における記念行事を行い、山梨大学大学院総合研究部医学域基礎医学系薬理学講座教授 小泉修一氏に『グリア細胞によるシナプス機能及び構造の制御』の題目で特別講演をしていただきました。



光先端医学教育研究センター開所式

同日に光先端医学教育研究センター開所式を行いました。今野学長が「本センターが拠点となり、光医学研究をさらに進展させ、世界に成果を発信するとともに、産学官連携の事業化につなげていきたい。」と挨拶し、さらなる発展を誓いました。



■ 浜松医科大学建学の理念

第1に優れた臨床医と独創性に富む研究者を養成し、第2に独創的研究並びに新しい医療技術の開発を推進し、第3に患者第一主義の診療を実践して地域医療の中核的役割を果たし、以て人類の健康と福祉に貢献する。

■ 浜松医科大学の目的及び使命

浜松医科大学は、医学・看護学の教育及び研究の機関として、最新の理論並びに応用を教授研究し、高度の知識・技術及び豊かな人間性と医の倫理を身に付けた優れた臨床医・看護専門職並びに医学研究者・看護学研究者を養成することを目的とし、医学及び看護学の進展に寄与し、地域医学・医療の中核的役割を果たし、以て人類の健康増進並びに福祉に貢献することを使命とする。

編集後記

浜松の地を踏んで早30年、時代とともに変わり行く浜松医科大学の姿にいろんな立場から触れてきました。そんな中で、本年4月にスタートしたスピード感あふれる新体制の下、災害時をはじめ医療現場における本学の役割・光先端医学教育研究センター開所による光医学研究への取り組みが明確に示され、また将来その機動力となる本学学生らの多方面での活躍など、ますます進化する本学の姿を読者の皆様にも感じてもらえたことと思います。ご多忙のなか、快くご執筆いただいた皆様に、編集委員一同心より感謝致します。

ニュースレター編集委員 Y.S.

ニュースレターはホームページからもご覧いただけます。

<https://www.hama-med.ac.jp/>



原稿募集

小誌をご覧になられた感想はいかがでしたでしょうか。読後のご感想やご意見をお寄せください。また、各欄(「研究最前線」「海の向こうで」「大学ニュース」「寄稿」「卒業生は今」など)への投稿や本学に関連する写真を、随時、募集しています。

職員や学生だけでなく、広く関係者の方々からのご提案をお待ちしております。読面づくりに、ぜひご参加ください。

広報室 koho@hama-med.ac.jp

編集・発行

浜松医科大学ニュースレター編集部会

発行日

平成28年10月1日

お問い合わせ

国立大学法人浜松医科大学 総務課 広報室
〒431-3192 静岡県浜松市東区半田山一丁目20番1号
TEL.053-435-2111(代表)